

魏志倭人傳 その1

倭人は帯方(たいほう)の東南の大海の中に在り。山島に依りて國邑を為す。舊(もと)百餘國。漢の時に朝見する者有り。今、使譯通ずるは三十國。

倭人は帯方の東南の大海の中に在り。山島に依拠して國や邑(むら)を形成している。旧は百余國。漢の時に朝見する者がいた。現在使者、通訳が行き来しているのは三十國である。

(帯方)郡より倭に至る。海岸に循(したが)って水行す。韓國を曆(へ)る。乍(あるい)は南、乍(あるい)は東、その北岸、狗邪韓國に到る。七千餘里

帯方郡より倭國へ行くには、半島の西海岸に従って船で南下する。韓國を通過する。韓國內を或いは南に或いは東に進んで倭の北岸、狗邪韓國に到着する。七千餘里



始めて一海を渡る。千餘里。對海國に至る。その大官は卑狗と云う。副(官)は卑奴母離と云う。絶島に居す。方四百餘里ばかり。土地は山險しく深林多し。道路は禽鹿(きんろく)の徑の如し。千餘戸有り。良田なく、海物を食して自活す。船に乗りて南北に市糶(してき)す。

狗邪韓國から始めて一海を渡る。千里余りて對海國(対馬)に到着する。その官は卑狗と云う。副官は卑奴母離と云う。對海國(対馬)は絶海の孤島にある。島は一辺四百里余りの方形である。山は険しく、森も深い。道路は野性の鹿が通う小道のようである。千戸余りの民家がある。良田は無く、海産物を食べて生活している。船に乗って南北に市糶す。

又南一海を渡る。千餘里。名は瀚海(かんかい)と云う。一大國に至る。官は亦卑狗と云う。副(官)は卑奴母離と云う。方三百里ばかり。竹木、叢林多し。三千許(ばかり)の家有り。差(やや)田地有り。田を耕せどなお食不足し、亦南北に市糶(してき)す。

對海國から再び南の方向に海を渡ると、千里余りで一大國(尙岐)に至る。一大國の官は卑狗と云う。副官は卑奴母離と云う。一大國の形は一辺三百里余りの方形である。島には竹林や叢林が多く、三千戸ほどの家がある。この島は、對海國に較べれば田地があり耕作する。だが、やはり、食糧は不足するので對海國と同じように船で南や北に米を買い入れに行く。



又一海を渡る千餘里。末盧國に至る。四千餘戸有り。山、海に濱(そつ)て居す。草木は茂盛し、行(一行)、前人を見ず。好んで魚鮓(ぎよふく)を捕らえる。水の深淺無く、皆、沈没してこれを取る。一大國から再び一海を渡ると、千里余りで九州の末盧國に着く。末盧國には四千戸余りの人家がある。山や海に沿って暮らす。この地には草木が生い茂り、一行は前を行く人を見ず。この地の人々も海の水深にかかわらず、皆海に潜って魚やあわびを取っている。

(末盧國の) 東南に陸行五百里伊都國に到る。官は爾支と云う。副は泄謨觚柄渠觚と云う。千餘戸有り。世(世々)王有り。皆女王國に統属す。郡使が往來し、常に駐まる。

末盧國から東南に陸路を進むと、五百里で伊都國に着く。伊都國の官は爾支と云う。副官は泄謨觚、柄渠觚と云う。千戸余りの民家がある。代々王がいる。王は皆女王國と統属する。郡使が往來し常に滞在するところである。

この単純で明快な漢文が日本国中で読み替えられている。この「東南」を「東北」に原文改訂して読まれている。その誤謬が、『倭人伝』の理解を根本的に歪め、日本中の大混乱の元凶となっている。帯方郡使が方角をまちがえたなどは決して起こりえなかったことである。方角は絶対認識である。どこの国の人であろうと、いつの時代であろうと時間、場所に関わりなく、東と云えば東である。東南と云えば東南である。いかなる理由を付けようとも、東南を東北に変更することは許されることではない。

『倭人伝』には、帯方郡の太守弓遵の使者建中校尉、梯備(ていしゆん)、また、太守王順(おうき)の使者、塞曹掾史張政等が倭國へ来たことが記されている。彼らは、末盧國から伊都國に通じる東南路を歩いたのである。決して、東北の路ではない。この東南路は国道203号線である。

また、倭國からの使者も帯方郡、魏の都洛陽へ行っている。その使者の名前は、難升米、牛利、伊聲耆、掖邪狗と正確に記録されている。倭國と帯方郡を結ぶこの道をお互いの使者が何百人と通ったのである。方角をまちがえて記録したわけではない。

糸島の「怡土郡」は唐津の東北である。したがって、「怡土郡」は『魏志倭人伝』が書いた伊都國ではない。『倭人伝』の伊都國は唐津の東南である。伊都國へは『倭人伝』が記している絶対認識「東南」を一切曲げずに進まなければならない。そして、これからも、『倭人伝』に記された方角を一切変えずに進まなければならない。

『倭人伝』の伊都國は、唐津から東南へ50kmほど行った所に存在する佐賀市である。現代の計測では、唐津市役所から佐賀市役所までの距離は、50.2kmである。



(伊都國の) 東南、奴國に至る。百里。官は兒馬觚と云う。副は卑奴母離と云う。二萬餘戸有り。

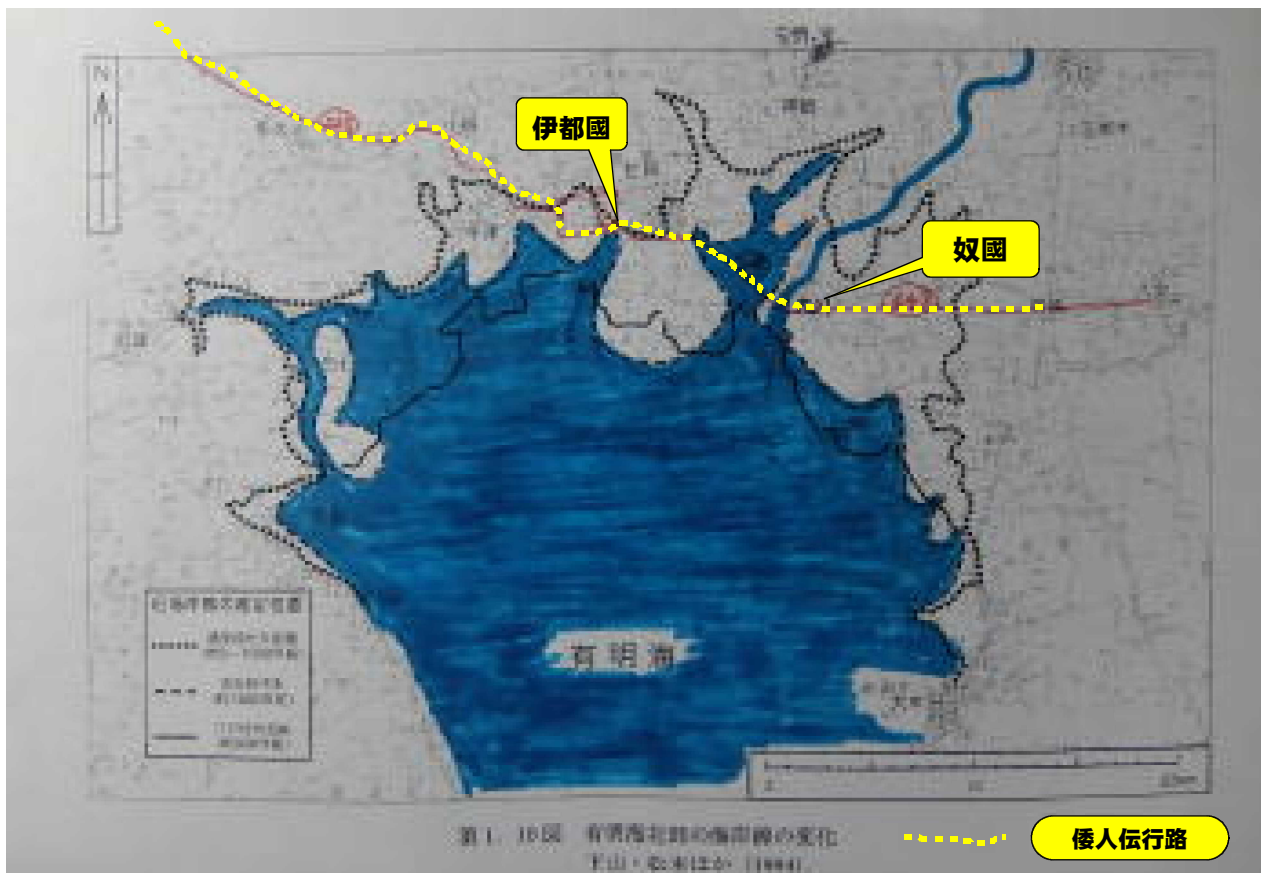
伊都國から東南に、奴國に到着する。百里。奴國の官は馬觚と云う。副官は卑奴母離と云う。二万戸余りの民家がある。

伊都國(佐賀市)を出て国道208号線を東南に進んで行くと筑後川にぶつかる。その地名は諸富津(もろどみつ)である。つい最近までここに筑後川の渡しがあった。そこで渡し船に乗ることにする。筑後川の中州、大中島へ渡る。再び舟に乗り、向島(むかいじま)へ渡る。向島は現在地続きであるが、古代は島だったであろう。また、舟に乗って筑後川の東岸大川市の若津に着く。大川市は佐賀市から東南にほぼ10km行ったところにある。大川市が奴國である。

奴國は「二万戸あり」と紹介されている大国である。大川市だけで、この人口があったと思えない。久留米市まで及ぶ大国だったのである。

<弥生時代(約1800年前)の有明海>

弥生の有明海は現在より北上していた。伊都國から奴國への道は海の下だった。



<地域地質研究報告>

5万分の1の地質図幅、福岡(14)第71号 NI-52-11-9「佐賀地域の地質」

下山正一・松浦浩久・日野剛徳氏

- (1) 大川市は現代とほとんど変わらない陸地であった。
- (2) 柳川市は市役所の西側まで有明海が迫っていた。国道208号線はかつて海沿いの街道だった。
- (3) 佐賀市の南は陸だったが、佐賀市の東側まで有明海が入り込んでいた。
- (4) 倭人伝とは無関係であるが、佐賀市の西、牛津は牛の角のように有明海が入り込んでいた。

奴國への記事には「陸行」「東行」という「行」という動詞がないと指摘したのは古田武彦氏である。そこで、古田氏は「奴國は本線上の國ではなく、傍國である」と結論した。だが、この結論は誤りである。卑弥呼の國へは奴國を通過しなければ行き着くことはできない。ただ、古田氏の指摘は新たな発見をもたらした。「行く」という動詞を使わない「東南至奴國百里」の道は、水の道だったのである。

(奴國から) 東行す。不彌國に至る。百里。官は多模と云う。副は卑奴母離と云う。千餘家有り。
奴國から東へ百里進むと不彌國に到着する。官は多模と云う。副官は卑奴母離と云う。千戸余りの家がある。

「東」とは当然、奴國の「東」である。この東は他の方向に読み替えられることはない。『倭人伝』の方角指示は順序よく示されている。この順序を自分の解釈に都合良く変更してはならない。

- ① 末廬國の東南、五百里陸路を歩むと伊都國に到着する。
- ② 伊都國の東南、百里で奴國に到着する。

③奴國の東、百里行くと不弥國に到着する。

不弥國は奴國の東10kmである。そこは筑後市である。大川市役所から筑後市役所までの距離は12kmである。この道は本当に不思議なほど東にまっすぐである。

(不弥國の)南、投馬國に至る。水行二十日。官は彌彌と云う。副は彌彌那利可と云う。五萬餘戸。

南、投馬國に至る。水行二十日である。官は弥弥と云う。副官は弥弥那利と云う。五万戸余りの民家がある。

投馬國は不弥國の南である。だが、通常、この南は東と改訂して読まれている。なぜなら、東と改訂すれば瀬戸内海となるからである。だが、『倭人伝』の方角は南である。南に水行するというのだから、その海は東シナ海である。投馬國へは「水行」と明示されている理由は、この航海には陸路がなかったからである。

不弥國とは筑後市である。筑後市は、現在、無論内陸部である。ここに水行ルートが存在したのか。3世紀の筑後市を訪ねてみよう。筑後市の南は海である。筑後市から南に20日間の航海を経て到着した国が投馬國である。その国は沖縄那覇市である。那覇市が投馬國である。



南、邪馬壹國に至る。女王の都とする所である。水行十日陸行一月

(不弥國の)南、邪馬壹國に到着する。女王が都とする所である。帯方郡から水行十日陸行一月である。

伊支馬と云う官が有る。次は彌馬升と云う。次彌馬獲支と云う。次は奴佳醜と云う。七萬餘戸有り。

官は伊支馬。次は弥馬升と云う。次は弥馬獲支と云う。次は奴佳醜と云う。七万戸余りある。

女王國より以北についてはその戸数、道里を略載し得た。

女王國より以北の国々についてはその戸数、道里を略載しえた。

その餘の旁國(ぼうこく)は遠絶。詳細を得るべからず

その他の旁國は遠絶で、詳しいことは得ることできない。

次に斯馬國有り。次に巳百支國有り。次に伊邪國有り。次に都支國あり。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に爲吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に窮臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。

此れ女王の境界の盡(つくる所である。

(不弥國の)次に斯馬國有り。次に巳百支國有り。次に伊邪國有り。次に都支國あり。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に爲吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に窮臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。

此れ女王の境界の盡(つくる所である。

その南に狗奴國有り。男子を王と為す。その官狗古智卑狗有り。女王に屬さず。

女王國の南には狗奴國が存在する。この國の王は男である。官は狗古智卑狗である。女王に屬さず。

(帶方)郡より女王國に至る萬二千餘里

帶方郡から女王國に到る。総距離は一萬二千余里である。



